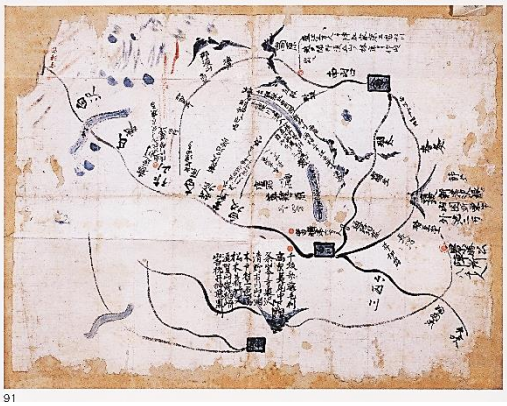
直江兼続とは

永禄三年（一五六〇）新潟県南魚沼市の坂戸城下樋口兼豊の長男として誕生。『藩翰譜』に兼豊は薪炭吏。母は直江景綱の妹か泉重歳の娘という。元和五年（一六一九）十二月十九日、江戸の鱗（うころ）屋敷（現警視庁）で病死。六十歳。米沢徳昌寺に埋葬、徳昌寺廃絶後、東源寺に改葬され、さらに林泉寺に改葬されている。



「白河口戦闘配備之図」米沢市立図書館蔵。配備の人数が書かれている

「皮籠原防塁跡」白河市南部に残る防塁。ここが主戦場と想定していた

東の関ケ原「幻の白河決戦」

慶長三年（一五九八）秀吉の命令で、越後から会津一二〇万石で移封。兼続は出羽国米沢六万石（三十万石とも）の所領が与えられる。二月十日『異本長帳』越後から石田三成、大谷吉継が会津に入る。兼続の屋敷は、山鹿素行生誕の地（会津若松市山鹿町）。八月十八日秀吉が死去。九月二十日『上杉文書』徳川秀忠から国替えの祝状と太刀等が送られる。

慶長四年（一五九九）二月五日独自行動をする家康に対し景勝、前田利家、石田三成らが起請文を提出。閏三月三日利家が死去。翌日三成は、家康の利家病気見舞いの時に家康を襲う計画だったことが発覚し加藤清正、黒田長政らに襲われ、家康に助けられ彦根の佐和山城に退去する。八月三日景勝は会津に戻り、九月一日『東国太平記』兼続は大坂を立ち佐和山城の三成を尋ね会津に入る。十一月角館の戸沢氏が家康に兼続の動静を報告。

慶長五年（一六〇〇）二月『上杉年譜』景勝は政宗を警戒し白石城改修を甘糟景継に命じる。『塔寺八幡宮長帳』白河口は人衆二万人で在番が命じられる。三月十八日『旧事雑考・塔寺八幡宮長帳』神指村の十三村が撤去され神指城本丸と二ノ丸、幅二十間（約三十六メートル）の堀が築き始められる。十二万人を動員し、総奉行は直江兼続。三月二十一日『上杉文書』上方の徳川秀忠から領内の普請や城の築城はもっともなことで承諾すると書状が届く。六月一日『旧事雑考』神指城の本丸石塁と門、二ノ丸土塁と堀がほぼ完成。越後の雲洞庵を会津若松市高野町に、上杉家菩提寺の林泉寺を若松城下南に移した。上杉謙信の遺骸を納めた御堂は、春日山から若松城内に移し、新たな御堂を神指城北に建て始め、城下町の町割りまでした。三月十一日『藩翰譜』上杉家を出奔した藤田信吉は家康に謀反を訴える。兼続は「直江状」を出したため、家康は会津討伐を決意し、六月二日『会津陣物語』家康は関東諸将に会津出征を告げる。

六月十日『上杉文書』神指城の工事を中止、各諸将に臨戦態勢命じる。『白河風土記』に白河関の街道を塞ぎ、新たに境明神に街道を造り、皮籠原の湿田に関東勢を引込み、底を抜いた酒樽二千個を並べ上流から水を流し込む作戦をとった。また、白河関に城を築き、道の西に小屋山城を築いた。白河には六万四千人配備。『要害禄』に景勝の本陣は勢至堂の道谷坂に築いた。『上杉文書』南山口横川、鹿沼右衛門に防塁構築を指示する。東の棚倉には、同盟を組んでいた佐竹義宣が子の義重に命じ防塁を築き四万人の軍を移動した。西の越後口津川には御小屋城が大改修された。

対する家康方は『大関家文書』黒羽城には改修され岡部長盛と服部半蔵が入った。七月二十一日『戸沢文書』家康は東北諸将に最上義光を総大将として会津出陣を命じる。七月二十一日『治家記録』政宗は白石城に向け出陣し翌日攻め落とす。七月二十四日『藩翰譜』三成の挙兵の知らせで評定、家康は大田原城に黒羽城に秀忠が入る予定だった。翌日、家康は水戸の佐竹に使者を送り、速やかに上杉討伐に動かなければ、水戸を攻めると脅し、家康は西に引き返した。

八月六日『兼続書状』会津に三成からの使者が来て、兼続が返事をする。八月十日『上杉年譜』兼続は家康追撃願いを景勝にするが許されなかった。二十二日『政宗文書』家康は百万石のお墨付きを政宗に与える。二十四日秀忠は宇都宮城を発し西に向った。

九月十一日兼続は、最上義光が同盟を裏切ったことを知り、山形の畑谷城を攻めた。九月十五日『継志集』家康方の伊王野氏が白河関山に進攻し小屋山城を襲い、上杉勢一七三人、徳川勢三九人戦死する。二十一日兼続のもとに関ケ原の敗戦、二十五日には最上義光に勝利の知らせが届く。二十九日兼続は長谷堂城から撤退する。十月六日『治家記録』政宗は、福島に二万人で進攻するも本庄氏の岡野佐内に攻められ命からがら帰る。十一月三日『上杉家記』景勝は本庄繁長を上洛させ家康に謝罪する。

江戸中期に描かれた「神指原古城之図」

上杉氏籠城戦の山城「向羽黒古塁之図」会津美里町東日本最強の山城

図・写真・文　©石田明夫2019　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「会津歴史観光ガイド協会」で検索。